
いっしょに図書館

わんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつしょに図書館

【著者名】

N 1 1 1 5 N

【作者名】

わんこ

【あらすじ】

うつかりそんな女の子。幼馴染みから誘われた場所は……。

通り慣れた図書館に向かうのがきょうは怖かった。

やましい影を背負うと、いつも心地良く感じる空間も針のむしろに感じてしまうからだ。

「しまつた……、うつかりしていた。わたしのバカバカ」

学校のラベルの貼られた文庫本、挟まれた紙に印字された返却期限はきのうのもの。その四文字と期日は、いくらぬぐつても消えることはなかつた。

たつた一冊なのに、たつた一、二日で読み切れるほどの大長さなのに、貸し出し期間の一週間を過ぎてしまつた失態。あのとき夏の誘惑に負けなければよかつたとか、期間限定のパフェのために並ばなければよかつたとか、早めに友だちのウチから帰ればよかつたとか、後悔しても過ぎ去つた一週間は帰らない。

以前から読みたかったこの本。やつと手に取ることの出来た一冊。だとうるさいのに、やりたいことが重なつて、憧れの本と過ぎる時間が削られたことは悔やんでも悔やみきれない。一日が二十五時間ぐらい、いや三十時間ぐらいあればよいのにと思ったことが、今までの人生の中でほかにあるだろうか。セミのつるさい校庭のベンチでわたしは一人で木陰でバッグを抱え込む。

「太田、なにしてんだ？」

聞き覚えのある男子の声。わたしを熟知した言葉のあやつり紐が、わたしの耳にきれいに絡んでくる。

平田だ。こいつは小さい頃から知つてゐる、いわゆる『幼馴染み』つてやつ。とにかく平田は小さい頃、野原という野原を走り回る『野生児』と言つうのに相応しい子だつた。短く切つた髪に、ランニングの日焼けの跡が、鮮烈に脳裏に焼きついてゐる。確か小学六年生の夏休み、市民図書館からの帰り道にて、平田がセミの抜け殻をわ

たしに見せ付けて恐怖のどん底に陥れたことはけっして忘れない。以来、セミの声が嫌いになつたのだからね。

そんな平田もわたしと同じ高校生。その面影を消すことなく、わたくしに小さいときの頃のように言葉をかけてきたのだ。平田の残す面影と同じように子ども扱いされるのは、どうしてもまっぴらだつたので一言で返事する。

「教えない」

「なんだよ、折角高校でまたいつしょになれたと思ったのに、太田は小学校の頃から変わらんな」

「中学でやつと離れ離れになつたと思ったのにね!」

平田はわたしに対していくまでも子ども扱いをしてくる。お互いまう高校生だというのに、『男の子』『女の子』という呼び方に恥じらいを抱えてくる頃だというのに、平田という男子はわたしの乙女心を逆なでするのだ。だつて、四捨五入したら一人とも二十歳だよつ。立派な大人に一步一歩近づいているんだよつ。

一人揃つて同じ高校に進学してクラスも別れ別れになつたが、同じ屋根の下で学んでいる宿命は必然的に顔を会わせることとなる。小さな頃の平田はわたしの顔を見るたびに、いつもちよつかいを出してくるヤツだ。わたしのホームグラウンドが図書館なら、平田のホームグラウンドは昆虫集う森の中だ。そして、お互いの場所は必然的にお互いアウェイとなる。さらに、アウェイに飛び出した平田ほど厄介なものはない。せつせと図書館通いをする幼き日のわたしを「本の虫ー!」と、虫かご抱えて平田は笑つていたことは忘れない。

わたしがお年頃の子が大好きなファッション誌を参考にしてまとめたボブショートも、小学生の頃から付き合つてゐる文学好きの証・メタルフレームのメガネも、ヤツにとつてはわたしをおちょくるための道具に過ぎない。

ヤツからわたしに話しかけてくることは、寝ているネコにネコジ

ヤラシを仕掛けてくるようなもの。放つておけばおくほどヤラツは調子に乗つてくる。だからといって構つてはいけない。しかし、平田の一言でわたしの腹づもりが変わつた。

「一緒に図書館行かない？」

小さい頃『野生児』で通つていた平田が、おおよそ口にすることなかつたような名称だ。『図書館』だなんて！わたしのメガネにひびが入る。ウソですけど。行きたい！図書館に行きたい！でも、きょうは行けない。それでも、行かなきゃいけない。

わたしの胸のうちを見通したかのように、平田は言葉で背中を押してくれた。言葉は行動よりも幾らかの勇気を与えてくれる。勇気の受け取り方は人それぞれだけど、平田の言葉は悔しいけれど少なくともわたしを力づけてくれた。でなければ、平田に「いいよ」だなんて言わないからだ。

トートバッグを肩に掛けた平田の顔は、わたしが見慣れた顔をしていた。短い髪も、日に焼けた肌も記憶の底と同じもの。平田とトートバッグのイメージがどうも結びつかなかつた。ただ、トートバッグを平田をおちよくるための道具にすることが、わたしには出来なかつた。

平田の後について学校内別館にある図書館の入り口をいつしょに潜る。たつた一日延滞しただけで、この部屋のすべてのものを敵に回したような気分になる。実際、わたしが延滞していることは図書委員以外の者は知り得ないはず。しかし、本棚の前に立つと他の誰かにわたしの過ちを見透かしているような気がして落ち着かない。わたしが本を遅れて返してきたというわるい子です。分厚い全集で思いつきりお尻をぶつても構いません。本の神さまの気が済むなら、お好きなだけどうぞ。冷たい蛍光灯の光でさえもわたしに正義の仕打ちをしているかのように感じる。

「おれ、本を返してくるからさ……ちょっと、待つわ」

平田はわたしが今いちばん近づきたくない『返却カウンター』へと、広い肩を揺らしてのそのそと歩いていった。

わたしは、遠くから平田を眺める。

別に平田のことを見渡むわけではないが、『野生児』が「本を借りていた」のだ、と思うと少し悔しい。セミの抜け殻を携えていたヤツが、驚いたことに本に持ち替えたのだ。

トートバッグから三冊の本を取り出して、返却カウンターに裏表紙を上に乗せた平田の背中は、やけに紳士的だつた。会釈までしている。手際よく図書委員が本のラベルに印刷されたバー・コードを機械で読み取つてゆく。知らず知らずのうちに、一冊一冊の動きをわたしは目で追つていた。

「三冊ですね」

何気ない図書委員の言葉にわたしは打ちのめされてしまった。

知つていてる。あの本、わたしは知つていてる。結構、あの本つて分厚かつたし内容も濃かつたはずだ。でも、キッチンと一週間以内で読破してしまつていてる。おまけに三冊もだ。本物の虫を追い回していた平田が、本の虫になつていたのだ。

平田が返却手続きを終えて、晴れやかな顔つきでわたしの元につかつかとやって来た。直接目を合わせるのは恥ずかしいので、平田を包む白いワイシャツの胸元に視線を向ける。

「結構、あの本……面白かつたなあ

「そう、なんだ」

「太田も読んでみたら？ ははっ、お前は本の虫だから、とっくに読んでいるだろうなあ。『ゴメン』

謝りたいのはわたしだ。分厚い三冊どころか、一冊の文庫本さえ軽く扱つてしまつたわたしは、地球上に存在する全ての本に土下座しなきやならない。例え、それで本たちが許してくれても、ちゃんと彼らと向き合つことが出来るかわたしは自信がない。

「ところでさあ。面白い本、知らないか？ 教えてくれよ

「なんで？」

「お前、本の虫じゃん」

わたしは返却期限を過ぎたこの文庫本を薦めようとしたが、その前にこの本を持って返却カウンターに並ぶ方が先だと悟り、平田の問いかけを無視した。

今年もヤハガツルセー。

おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1115n/>

いっしょに図書館

2010年10月8日14時34分発行